

もくよう
想像
クラブ



日向敏
Bin Himukai

「飛び出し注意」の看板があるよつかどを右折したら、私の家からいちばん近い公園がある。公園には、ブランコと球体状のジャングルジムがある。ジャングルジムはいかにも回りそうな見た目なのに、中心の柱と土台が固定されていて回らない。黄色い屋根が見えて、「うちから公園まで10秒で行けるに！ 走ったら5秒！」と同じ登校班の吉岡さんが言っていたのを思い出す。吉岡さんの黄色い家をすぎて、ブロック塀を左折したら、また私の家に近づく。ブロック塀は薄い灰色の長方形のブロックが積み重なっていて、そのつなぎ目が溝になっている。私は溝に顔を近づける。近づける前から、茶色と白のマーブル模様のまゆも、ミノムシも、カマキリのこどももいないのは気づいている。そんなことくらい知っている。暑いからしょうがない。こんな時期にカマキリなんかいたら、きっと異常発生とかいうやつだ。カマキリのこどもはもっとすずしい時期に生まれるし、マーブル模様のまゆはもっと寒い時期に出現するし、ミノムシはそのまゆがいつの間にかできるよりも前に壁にくっつく。

蜘蛛のこどもならいるかと思ったが、いない。暑い。私は歩きながら手を背中に背負ったリュックの前ポケットに持っていく。右手で半ばまで開けて、ジッパーのひっぱるところを左手に渡す。左手が残り半分を開ける。そこで私はリュックの肩掛け部分から右腕だけ抜き、リュックを腰に回して、本格的に鍵を探し始める。

昨日は水曜日で、水泳に行く日だった。昨日の私は家に帰って、鍵だけを抜いてリュックを下ろし、水泳用のかばんをつかんで家の鍵を閉めたはずだ。それから、水泳用のかばんに家の鍵を入れて公園に行った。鍵は水着やゴーグルの間をすべって行って、すぐにかばんの底に入っていったはずだ。私は走った。家を出たのは午後3時54分。午後4時になると、公園の前にスイミングスクールのバスが来る。

水泳から帰って、まっすぐ脱衣所に向かってタオルを洗濯かごに入れた。うちのお風呂場には、シャワーや浴そうがあるのと同じ部屋に、洗濯機がそのまま置いてある。洗濯機がなかったら、もっとうちの風呂は広い。

「先にお風呂入っちゃいなさい、今日は暑いからシャワーだけだよ」お母さんが台所から言う。水着とキャップとゴーグルを手洗いして脱水機に入れて、ゴーグルは脱衣所の足拭きタオルのところを出して、それから体を洗った。すりガラスふうの透明な扉の向こうで人の気配がすると思ったら、脱衣所にお母さんが入って来て、出ていっ

た。水泳用のかばんは、その間、脱衣所に置いてけぼりにしていた。風呂から上がったら、寝巻きと下着が用意してあって、それに着替えたときも、水泳用のかばんはまだ脱衣所にあった。だから、ゴーグルの水気をタオルでぬぐっている時も、脱水が終わった水着とキャップを持って出てベランダに干している時も、水泳用のかばんを元の場所に掛けておかなくてはと、ベランダの鍵を閉めるやいなや脱衣所に戻ってゴーグルと水泳用のかばんを救出し、かばんにゴーグルを入れ、かっぱや傘が掛けてある、玄関のいつもの場所のいつもの出っ張りに引っ掛けておいたのだ。

ここまで思い返してみたけど、やっぱり、水泳用のかばんから鍵を取り出した記憶がなかった。全然ない。だからたぶん鍵はリュックの中じゃない。そうこうしているうちに、私の家は目の前にあって、私は、道路と家の境界線になっている、ひし形がたくさん連なったような見た目のシャッターをちょっとだけ開けた。車が2台入るコンクリートじきの車庫は、ところどころ芝生が植えられている。芝生みたいな、葉っぱが細くてしゅっとした草や、葉はなくてちょっと太めの莖ばかりのびているようなのも芝生に混じっている。屋根がなくて暑すぎるせいなのか、芝生と芝生もどきの草のなかには、しおれて茶色くなりかけているのもあった。玄関への通り道をふさぐように茂るハイビスカスの横を抜け、低いうえに2段しかない階段を上るとゴールだ。私は玄関扉の前に座り込む。

玄関にはちょっとしたアーチ状の屋根がかかっている。しかも、玄関はだいたい東向きだ。太陽は西に沈む。だから私は日かげにいらることができる。玄関にふかれた石は、冷たいというほどではないけれど、それなりに冷えていて気持ちがいい。

リュックから水筒を取り出す。学校を出る前に、廊下の水飲み場の水をそそぎ口までいっぱい入れてきた（ふたを閉めるときにあふれた）。学校の水道水はあまり冷えていない。しかもあんまりおいしくない。でも、今はおいしかった。体が求めているというやつだ、と私は思う。水泳のコーチは「しっかり水を飲みなさい」と言う。去年とおとしも言っていた。「水泳は全身を使う運動です。君たちは水の中にいるから見えないだろうけど、水の中にもたくさん汗をかきます。放っておくと、体がきちんと動かなくなって大変なことになるので、水泳が終わったら、水を飲むこと」人間は体の半分が水らしい。こどもは赤ちゃんより体の中の水の量が少ないらしい。大人はこどもよりも水が少ないらしい。大きくなるたびに、水が蒸発しやすくなるのだろうか。

私は水筒の水を半分まで飲む。のどがごっごつと音をたてる。ごくごく飲んでいる自分が楽しい。ちょっと息が苦しくなってやめる。水筒を脇に置き、かばんをあさってみる。荷物を全て出して確認する。

まだ開いていない『ファールこんちゅう記幼年版1』、読み終わったばかりの『朝びらき丸東の海へ』（明日は、登校したらすぐ

図書室に寄ろう)、連絡帳、算数と国語と理科と社会の教科書、それぞれのノート、算数のドリル、ノートの間に挟んでいた手紙(うみちゃんからもらったやつで、きれいにハート形に折られている)、下じき、筆箱、もう無くなったと思っていた小さい丸い消しゴム、先生から配られたプリントが2枚、何かの紙の端っこがちぎれたやつ、ハンカチ、給食当番用のマスク、ポケットティッシュ、くしゃくしゃになったスーパーの袋、かたく丸めたティッシュのごみ(捨てようと思っていた!)。(みかんの皮や、ピーナッツバターとゼリーをはさんだサンドイッチが出てこないのが残念)。

前の方のポケットからは、つかさからもらったシール(銀のキラキラがついている)、公民館の放課後こども工作教室に2日間通って作った竹とんぼ、厚紙とひもで出来た両手で引っ張って遊ぶコマが色違いで2つ。それらに点々とくつつく茶色い半透明のごみは、粉々になった蟬の抜け殻だった。

まだそれなりの大きさで残っていた蟬の抜け殻のお腹の部分を、春に芝桜が咲いていたあたりに放り投げ、空っぽになったリュックを逆さまにして大きく振った。それでも、前ポケットにくっついていた蟬の殻は簡単には取れない。立ち上がり、もういちど両手で大きく振ったら、ティッシュのごみが勢いづいて車庫まで飛んで行った。ティッシュが今いるところまで家の影は届いているけれど、玄関のそばよりもそちらの方が少し暑いのを私は知っている。しばらくティッシュをにらんでいたが、ティッシュはなまけ者で自分から

動いてはくれない。広げた荷物を元どおりリュックに戻している間、向かい風が吹いたらいいのにと願ったが、そんなことは起きなかった。

荷物は元どおりにした。3つ数えたら取りに行こう、と思って数え出し、3まで数えて、10数えたら取りに行こう、と思い、最後に1分たったら取りに行こうと決める。55で立ち上がり、60で走りだし、とって戻ったら今度は飛ばないようにあじさいの鉢のそばにあった石を上に乗せた。

もちろん、その間に鍵が見つかることは無かった。それで、私は扉に背をもたれ、足を前に投げ出して、理想の帰り道を作ることにした。理想の帰り道を頭の中で想像することが、最近の私のしゅみだ。『ファールこんちゅう記』は家に帰ってからゆっくり読むのだ。理想の帰り道作りに取りかかる前、6月までは、理想の学校作りをしていた。

6月いっぱいかけて私が作った学校は、私が通う小学校をもっと楽しくてすてきなものにしたものだ。

まず、ちょっとした散歩ができる裏山を用意した（お父さんやお母さんが通っていた学校の裏には小さな山があったと聞いた。なだらかで、登りやすく、「もみじや」「クロモジの木がわんさか生えている」。休み時間になると、不良も優等生もこっそり裏山に行く。本当は禁止されているのに。もみじやクロモジの木は本来の道

をそれた、けもの道にそって生えていて、そのけもの道をずっと行くと、電波塔の裏手に抜ける。電波塔はフェンスで囲まれていて、フェンスの脇には、「5月に青紫に白混じりの花を咲かせる桐の木が2本植わっている。花を見るには大きく見上げなければならない。桐の木は背が高く、花は上の方につく」。近所の人たちも時々散歩をしにくる)。裏山へは校庭をつつきるとすぐに着くだろう。

私が作った裏山のふもとは、ぶらんこが30以上あって(これで誰も取り合いをせずにする)、固定されていない球状のアスレチックジムや、すべるところにコロがついていてすごくすべりやすくなっている長い長いすべり台や、編み上げられた太いひもにぶら下がって遊ぶやつもある。そこはいつも手入れがゆきとどいているのと、遊具すべてが光触媒かなんかの素材でできているから、どんなに遊んでも手が臭くなったりしない。光触媒は光の力でそういうことができるものだ。

遊び場はツツジの植え込みで囲ってあるが、ツツジの植え込みには、どこかに子どもがひとり通り抜けられるほどの切れ目がある。その切れ目は一見葉っぱで隠れているから、先生たちも知らない。切れ目に気づいた人は、こっそり遊び場を抜けて、隠されたトンネルに入ることができる。トンネルは、『トトロ』に出てくるトンネルをそのまま持ってきた。だから、そのトンネルの途中には、こどもが何人か入れる背の高い半球形の部屋がある。サツキちゃんがメイちゃんを見つけたところだ。半球は巨大に育ったツツジの枝で編

み込むように形作られている。下には、湿気ることがない、ふかふかの落ち葉をしきつめてある。電気がなくても明るいのは、枝葉のすきまから光が差してくるからだ。私はそこで本を読んでも良いし、昼寝をしてもいい。半球にはエメラルドみたいな色合いのコガネムシもやってくるから、私はそのコガネムシのぴかぴかした背中を飽きるまでながめることができる。

裏山にはいろいろなものがあるけれど、校庭には真ん中に大きな木が1本生えているだけだ。それは本当に大きくて、サザエさんの短いアニメの間に挟まれるコマーシャルに出てくる木みたいで、全校生徒がその木の木陰ですずめるくらい枝がのびている。また、枝はちょうど登りやすい位置に生えていて、うまくやると、いちばんてっぺんまで登りきれる。いちばんてっぺんから顔を出して裏山を見ると、裏山にあるすべり台で今まさにすべっている人に手を振ることができる。

校庭の隣にはガラスでおおわれた室内プールがある。室内プールは25メートルはあって、1から3のレーンは、低学年でも泳げるように底が浅くなっている。さらにその隣に、50メートルの室外プールがある。そのプールは、プールサイドに草が生えないし、つぶすと真っ赤になる見た目も赤くて小さな虫や、カエルが入り込むことがない。人体に優しい除草剤と虫除けの薬を使っているからだ。それらはハーブとかで出来ているんだろう。プールの水深は2メートル以上あって、息を吐きながら潜ると、自分から出て行く酸素のご

ぼごぼという細かい音と、しゃーしゃらしゃらーと高くひびく水の音だけがする。光は、動き続ける細い輪の模様をプールの底に映しだす。息を止めるのが苦しくないうちは、ちょっと上を見上げて

(すっかり見上げると鼻が痛くなるからしないほうがいい)、水面にもある光の模様や、水面の向こうの空をながめるのも楽しい。この2つのプールは、いつ入っても誰にもしかられない。プールの隣には着替えるところがあって、着替えるところとプールの間は渡り廊下でつながっている。廊下の床は、すべり止めがついたゴム製の床で、プールまでの間に、トイレもあるし、シャワーもあるし、髪を乾かすところもある。スイミングスクールみたいに。

学校に入ると、天井が高くて、てっぺんがスタンドグラスになっている大きなホールがあって、そこにたくさん本棚が並んでいる。机やイスもあるから、ホールは図書室にもなる。図書室の机で本を読んでいると、スタンドグラスの色が机に落ちてきて、本の色が緑や青や黄色に染まる。ホールを中心に、廊下が7本のびている。それぞれの廊下に、1年生さんから6年生までの教室がある。最後の1本には、理科室や図工室みたいな授業で時々行く部屋と、給食を取りに行く所がある。学年が上がっても図書室までは同じ距離で行けるし(4年1組と4年3組とで教室2つぶんくらいの不公平があるかもしれないけど)、行き帰りの時には必ず図書室を横切るか横目で見ることになるから、本を返し忘れずにすむ。4年生になったら教室が2階の奥の方になってしまって、1階にある図書館まで遠くなると

ということもない。ついでに、理科室や図工室にあるイスは、かたくて四角くて座りにくいイスじゃなく、背もたれがついて座るところにクッションがついたイスに入れ替える。理科室では、濃い灰色に白いぶちをたくさんつけたシーラカンスを飼っている。理科室の壁いちめんが水そうになっていて、そこでシーラカンスはゆったり泳ぎ、ときどき、手を振ったような動作とともにこちらを見る。シーラカンスの世話は6年生だけじゃなく、4年生でもできる。

学校の玄関を出ると、ニワトリとウコッケイと色とりどりのオウムとウサギとモルモットが飼われていて、少し離れて、亀とアヒルとワニの小屋がある。ワニは、去年、別府のワニ園で見たやつよりもずっと大きいけれど、ちゃんと人になれていて、飼育当番が掃除をするときにうっかりしっぽを踏みかけてしまっても怒って暴れたりしない。ワニが口を開けていると、そこらへんのスズメたちがやってきて、ワニの歯につまったえさのかすをつつく。ワニは決してスズメを食べたりしないけれど、飼育当番のときにそれを見かけたら、ときどきしながらワニを監視するのだ。

ワニたちのいる小屋は、学校に流れ込む小さな川から水を引いている。その川は、学校から離れたところで、大きな船が行き来できるほどの広い川につながり、さらに海に流れこむ。いつか、海の方から帆をいっぱいにした大きな船が川に迷い込んでくる。その大きな船はたくさんの船室を持ち、保存食料をぎっしり積んでいる。旧式の船で、バラストは入っていない。よくゆれるから他の人はよっ

てしまうけど、私はよわない体質だから、もし船に乗っていいといきなり言われても大丈夫だ。

学校にある川には丸太で作った栈橋があり、そこに小舟が一そうつないである。ふだんは誰も乗らないから、鶺鴒やアオサギが舟を休憩場所にしている。私はその舟をどうやってあやつるのか分からないが、必要になったら、ただ乗るだけで、川の流れが舟を進めてくれるだろう（お母さんが読んでくれたゲドの話に出てくる魔法使いなら、舟を動かすだけの風を集めることができるだろうけど、私は今のところ魔法使いじゃない）。

学校の中にあるほうの川の近くには、花だんもたくさんあって、いちばん手前にはオレンジ色のマリーゴールドと赤と黄色のケイトウが植えられている。それから、理科の授業で習うヘチマがからまる棚があり、家庭科の授業で使うサツマイモやプチトマトだけじゃなく、イチゴやスイカも元気に育っている。片すみにある温室はふさがれていないから、ちゃんと入ることができる。中には緑と赤紫のウツボカズラがぶらさがり、ハエトリソウがのんびり口を開けて、真っ赤なハートのくぼみから薄黄色の房が立っている花や、まぶしいくらいにきれいな青緑色の花をつけるヒスイカズラや、ぶ厚い葉っぱを花のように開くサボテンの仲間がいたりする。でも、温室ならではのあの妙なにおいはしない。花だんや温室のあるところと、校庭の区切りにはグラジオラスが2列になって植えられていて、赤やオレンジ色や、黄色や白の花が咲く。この学校は特別だから、花が

終わる時期になっても、グラジオラスの花にいやな茶色の筋が入ることはないし、なんなら雪が降るころでも花が咲く。

学校のしきちから道路までの間の道には、片側にふつうの桜（だけど、ちゃんと実がなる。あの大きくて毛が長い虫は住んでいるけれど、人が桜の下を歩いているときに落ちてくることはない）、もう片側に薄い茶色と白っぽい茶色と茶色のマーブル模様の幹が楽しいサルスベリと、黄緑の花をつけるギョイコウ（園芸試験場の市民開放日にこの桜を見た。たしか漢字3文字だった。黄、という漢字が入っていた）という変わった桜と、普通の桜よりも咲くのが早いしだれ桜と、桃と梅が並んでいる。梅と桃はどちらも甘い実をつける。

こうした木々にはさまれた道を抜けると、家に帰る歩道にぶつかる。左に進むと公民館があるけれど、ひとまず右折するところから私の帰り道が始まる。

昨日までの間に、歩道は全て明るい黄色とオレンジと茶色のレンガでほそうされることが決まった。雨が降っても大きな水たまりができない道で、途中でふたまたに分かれている。片方は私の家の前まで続いているが、もうひとつはエメラルドの都につながっているから、うっかりそちらに行ってしまうはいけない。また、道のところどころに、つやつやした赤黒いグミや、つぶつぶの黒い実をつけるクワの木や、あまり背が高くないビワや、枝が大きく歩道にむかってたれている夏みかんの木が生えていることにした。それらの木には「ご

自由にお食べください」と札がかかっているから安心だ（お父さんのお姉さん、つまり私の伯母さんによると、他の人のしきち内に生えている木は、たとえ枝が歩道にかかっている、勝手に枝を切ってはいけないし、もちろんその実をもいで食べてはいけないそうだ。ただし、根っこがお隣の人の庭にのびてきたら、お隣の人は根っこを切っても問題はない）。今日はこれに加えて、学校から私の家までの間にちょうどいい日かげを作る雲をいつでも浮かばせておくことにした。風が吹いても動かないし、雨が降ってもその雲がさえぎってくれる。ただし、ちょうどこの雲の下で芽を出した植物が水を必要としている時には、私がふつうの教室でふつうの授業を受けている間か、家やスイミングスクールにいる間か、とにかく雨が降ってほしい日なら、雨を降らせてもかまわないことにする。

（あ、学校にも、この雲ほしい）

私は完ぺきだと思っていた私の想像の中の学校に手を入れる。急いであちこちに雲を浮かべるが、足りない。裏山と校庭とプールにも必要だし、動物たちの小屋の近くや花だんにも雲が必要だ。しかし、そうすると植物はちゃんと育たないかもしれない。プールの中できれいな光の輪を見ることもできなくなる。困った。

私は目の前で緑の葉をつけているハイビスカスを見た。ハイビスカスは全体的に色が濃い。日によって真っ黒にも見える赤色の花をたくさんつけている。この花をばらばらにすると、内側は白いの

かと思ったら、内側まで同じように暗い赤だった。葉っぱにはきつと、葉緑体がたくさんいるんだろう。

風がないから、ハイビスカスはちっともそよがない。日かげにいてもまだ暑かったが、喉は乾いていない。つまらない灰色のレンガぶきの玄関の床は、私の体温でだんだんあたたかくなってきた。私は座る位置をずらす。次のレンガは冷たい。

私の家の庭はせまい。玄関から車庫までの間、私が大またで歩いて4歩分くらいの幅しかない。その庭のほとんどをハイビスカスと鉢に入っているくせにどんどん大きくなる白いあじさいとがせんりょうして、玄関の階段脇に、春になると蛍光マーカーで描いたようなピンクの花を咲かせる芝桜があるきりだ。背の高い木はない。お母さんはもっと広い庭が欲しいらしい。「そしたらもう少し色々な花が植えられるし」家の中には、水ひなげしとめだかが入った大きめのガラス鉢があったり、お母さんが仕事場の人から株分けしてもらった、ふ入りのポトスがベランダにぶら下がっていたり、もらいものの金魚草の鉢植えがベランダのすみにならんでいたりする。お父さんも庭があると犬が飼えるなど言う。でも、お父さんは引越す気が全くない。あの家みたいに、犬と走り回れる庭が欲しいなと私は思う。

お父さんとお母さんがこの家を買う前、いくつか他の家もこうにゆうこうほにしていたらしい。たてうりの新しいのと、庭がきれいな中古のと、車庫が広い中古。お母さんは、本当は庭がきれいな方が

いいと思っていたが、「高かったし、ちょっと駐車場が小さかった」から諦めた。「私の車がなかったらあっちにしていた」

私は、お母さんが買いたいと思った家に入ったことがある。吉岡さんに誘われてその家に行った。あの家の子は、隣のクラスにいて、私はまだ同じクラスになったことがない。それに、登校班も違う。その家は3階建てで、下は物置と駐車場で、歩道からは駐車場の横にくっついているらせん階段をのぼって行く。段が高い階段だ。階段の途中には5段ごとに丸い花だんが備えつけられていて、下の花だんには花にらが咲いていて、上の花壇にはすずらんよりも花の先がとがって、ちょっと反って、先っぽに緑の丸い模様がついた花があった。登りきると、かりんと姫りんごの木が植えられていて（その家の子は「蜂が来て困る」と言っていた）、芝はどこもかしこも青々としているのに、歩きやすいように短く刈ってあった。家の中には、コンロや流しの真向かいにカウンター席があってわくわくした。ドリトル先生の家を訪ねたトミー少年みたいにソーセージをいためてもらったら、そのままカウンターで食べることができる。

その夜、こんな家に遊びに行ったらとお母さんに話したら、もし、あとき私がどうしてもあの庭と階段の家がいいと主張していれば、今ごろおまえもそこに住めたのにねと言われた。その夜、お風呂からあがって台所に行ったら、お母さんはラジオをつけてニュースを聞きながら、雑誌を広げていた。お母さんの目の前の席に座って雑誌をのぞきこむと、間取りがたくさんのついていた。お母さんが住み

たかった家では、今、毛が長い猫を飼っている。猫は室内をゆったり歩いて、それからいきなり立ち止まり、いきなり食器棚の上に飛び乗った。その間、ほとんど音を立てなかった。猫はとても静かな生きもののようだ。お母さんは雑誌を指差して、「これ、あの家に似てない？」と言う。私はあの家の庭を思い出す。あの芝生の上なら、犬とボール遊びができそう。犬を飼うスペースはじゅうぶんにあるのに、どうして犬を飼わないんだろう。

遠くから、犬がはっはっ、はっはっと息を吐く音がする。犬はきつと舌を出している。まだ見えていないけど、このあたりで散歩するのは、お隣の細田のおばあちゃんちのキープだ。細田のおばあちゃんのだんなさんが生きていたころから細田さんちで飼っている犬で、芝犬となにかの犬のこどもだと聞いた。キープは全体的に茶色だけど、背中からしっぽにかけては黒っぽい毛が混じっている。目はたれている。吉岡さんが飼っている芝犬は、まゆげみたいな模様の毛があって、目はたれていなくて、まっすぐに人を見ながら飛びはねるし、ひとみがきらきらしているのがよくわかる。元気すぎてちょっと怖いときもある。それに比べて、キープは優しく、いつも首を傾けて困っているように見える。

私はキープにあいさつしようと、ハイビスカスの茂みを越えた。そこで、コツコツと、聞きなれない足音がするのに気づき、後じさつてハイビスカスに隠れた。細田のおばあちゃんはこんな足音を立て

る靴をはかない。夏はだいたいぺたんこのサンダルだ。そういえば、前の土曜日にお母さんと桃のおすそ分けをしに行った時、おばあちゃんは「最近暑いけ、陽が落ちんと散歩に行かれんでねえ」と言っていた。「昼間は寝とおます」

コツコツ音は犬の吐く息の音といっしょに近づいて来る。こっそり見てみると、道路には、黒い日傘をさしてサングラスをかけた女の人がいた。見たことがない人だった。でも、その人が連れているのは、キープだ。キープは分かる。この人は誰だ。

女の方は、片手で日傘を持っている。黒くて、縁にレースがついた傘だ。けんこう骨の近くまで髪を伸ばしている。髪は暗い茶色で、ゆったり波打っていた。薄茶色のレンズのサングラスをかけていて、サングラスのつるは黄色に近い茶色だった。レモン色の半袖の下に黒い長い手袋をはめているから、長そでの服みたいになっている。日傘と反対の手に持つひもは、いつも細田のおばあちゃんがキープの散歩に使う、赤と灰色のひもをよじりあわせたものだけど、いっしょに持っている糞を回収する道具をいれた手さげは、おばあちゃんお手製のクラフトテープで編んだものではなく、コンビニのレジ袋だった。

キープは私の家のシャッターの前でうろうろして、なかなか進まない。いつもなら私が出てくるから、待っていてくれるのかもしれない。犬の嗅覚は人の何倍もあると聞いたから、きっと、私がここにいる、キープと、キープを連れている人を見ていることにだって

気づいているだろう。でも、私はハイビスカスの向こうに出ない。知らない人は怖い。なんとなく、何かしておかなくてはいけない気がして、リュックからふたたびファーブルこんちゅう記を出して、適当にページを広げた。これでもしあの女の人が近くまで来ても顔が隠れる。

あの女の人はキーブが動かないからまだ私の家の前にいる。この人が、可愛い犬をさらう盗人だったらどうしよう。今、細田のおばあちゃんはお昼寝のまっ最中だろう。夜になって、おばあちゃんはキーブがいないのに気づいて、警察に通報するだろう。警察の人は夜中に近所じゅうの家のベルを鳴らすだろう。お隣の家のわんちゃんがさらわれました。なにかご存知ないですか？ 午後4時から8時にかけて、この付近で怪しい人は見かけませんでしたか？ お母さんもお父さんもその時間は仕事で、怪しい人なんて見ていない。そうしたら、答えられるのは私だけだ。今は何時だろう。まだ5時のチャイムは鳴っていないから5時前だ。今、私が道路まで出たら、盗人はどうするだろうか。顔を見られたと思って逃げてくれるだろうか。キーブを細田のおばあちゃんのところに帰してくれるだろうか。

迷っているうちにキーブが動き出す。私は本を持ったままハイビスカスの茂みから顔を出す。キーブを連れた人が、いっしゅんだけ私を見て（私はすかさずなんでもない顔で見つめ返す）、すぐまた前を見る。私に自分の顔を覚えられないようにしているのだろうか。

女の人はそのまま細田のおばあちゃんの家に入っていく。キープと外の小屋をつなぐ鎖の音がかすかに聞こえる。おばあちゃんちの玄関の扉がからからと開く音がする。コツコツ音が全く聞こえなくなる。私は音を立てないようにうちの玄関を離れて人の行った方向を見る。どうしよう。どうしたらいいだろう。今すぐキープの無事を確認したかった。でも、あの怖い人がまだ細田のおばあちゃんの家に行ったらと思うと足がすくむ。それともあの女の人が盗人だというのは、私のかんちがいだろうか。そうだといい。きっと考えすぎだ。キープだって吠えたり嫌がったりしていないようだった（もし、あの女の人がものすごい技を持った犬盗人で、どんな犬でもあつというまに手なづけてしまえる人だったら、キープは吠えないだろう）。キープはああ見えて賢いからそのくらいの分別はつく（でも、キープはすごく優しい犬だから、ちょっとくらい怪しい人でも、散歩につきあってあげようとするかもしれない。甘いよ、キープ！）。まさかそんなわけがない。あの人はスカートみたいなズボンみたいなのをはいていた。それには紺色の地にピンクや青の細かい花柄がたくさんついていて。靴は青くて高いかかとがついたサンダルみたいなものだった。何より、黒い日傘の縁には大きな花びらみたいな柄のレースがついていた。犬をさらう悪い人が、あんな傘をさすだろうか？

その瞬間、私は私の想像の小学校では、生徒めいめいに、それぞれに見合った大きさの雲がついていることにすればいいのだとひらめく。

この学校に入学すると、まずひとりずつ雲をもらうのだ。その雲はこれからずっといっしょに学校生活を送るから、みんなが雲に名前をつける。家に連れて帰ることもできるけど、上靴みたいに、学校に置きっ放しにすることもできる。置きっ放しにされた雲は、翌朝の登校時間までは寄り集まって、学校のなかで、どこか雨を降らせたくないところにいればいいんじゃないか。

また、コツコツ音がする。ピッと音がして、車の扉が開く。あまり勢いのない、私の知らないエンジン音が鳴る。車が出て行く。車は私の家の方には向かってこない。私があわてて道路に出ると、屋根だけが白いクリーム色の小さめの車が曲がって見えなくなるところだった。でも車が四角い形なのは分かった。ミラーも丸っこい四角だった。ナンバープレートが見えなかったのがくやしい。キープはどうしただろう。あの車の中にいやしないだろうか。道路はととてもとても暑くて、長い間ここにいたくない。私は玄関に戻る。座り込むと、心臓が水泳の「アップ」の時間みたいに強く脈を打っているのが分かる。細田のおばあちゃんの家に行くべきだろうか。私は水筒に残っていた水を全部飲む。階段の下の段に足を伸ばす。そう

すると、お尻のほう足よりも高くなって座りやすい。うちの玄関の階段は、あの子の家の外の階段よりずっと低い。

キープがさらわれるわけがない、と私は思う。細田のおばあちゃんが、誰かに散歩を頼んだだけだ。最近は昼寝をしてしまうから、キープが明るいうちに散歩できない。それで、知り合いに散歩してもらったのだ。きっとそうだ。

私の家の玄関のレンガが目に入る。みんな、青がかった灰色だ。私の理想の帰り道にふかれたレンガには、3種類の色があるから、それらを組み合わせて好きに模様を作ることができる。遠くから模様を見ると、フンコロガシやコガネムシや花カマキリやガーベラやトケイソウの模様になっているといい。ナスカの地上絵みたいに、しっぽがくるくるになったサルでも、両腕をしっかり伸ばしたくちばしの長い鳥でもいい。ナスカの地上絵は近づくと溝になっているらしい。だから、私がナスカの絵がある場所に行ったら、絵は見えないし、溝につまづいてしまうだろう。でも、レンガの色を変えて絵を作るなら、そんなことは心配なくていいのだ。きっとそうだ。

シャッターを開けてさっさと入ってきたのは細田のおばあちゃんだった。シャッターを開けられるまで、誰かがやって来るのに気づいていなかったから、私はびっくりした。おばあちゃんはずんずん早足でやってきた。早足になっても、いつもパーマをかけているか

のような短くてくせの強い髪は動かない（「パーマはかけとらんよ」）。手には回覧板があり、私の前にきてしゃがみこんだ。

「どうしたあ、家に入らんだ？」

「鍵は、スイミングのやつの中にあって」

「忘れた？」

「そう」

「そげかあ。いつからここで座っと一だ？ 30分前くらい？ 暑いけん体がえらくなつてしまあよ。うちに来一だわ。お母さん帰って来なあまでおったらええが」

細田のおばあちゃんは、キープの話をしな。キープが外に出ていることは気づいていないのだろうか。でもおばあちゃんは、今家から出てきた（音を聞き取りそこねたからはっきりしないけれど、そのはずだ）。あの女の人がキープと歩いて行ってから、そんなに時間はたっていない。おばあちゃんちは、テレビがある部屋の縁側の近くにキープの小屋がある。おばあちゃんは、起きているとき、だいたいテレビの部屋にいる。あのとき、鎖の音がしていたし、何かあれば気づくはずだ。

「キープは？」

「キープ？ さっき散歩さしとったの見んかった？」

散歩させていたのは、おばあちゃんだろうか。そう思ったけど、確かめるのが怖かった。もしおばあちゃんがキープを散歩させていたなら、私はその様子を見ていない。でも、それを私が見たと細田

のおばあちゃんが思っているのはなぜだろう。私以外の、私の年くらいの、私にそっくりな人がこのあたりを歩いていたのだろうか（そんな子が近くに住んでいたら、きっと私も知っているはずだ）。おばあちゃんがキープを散歩させていたなら、私がさっき見た犬は、キープではない別の犬だったのだろうか。確かめたい。確かめたくない。まだ帰り道の想像していたい。このままおばあちゃんの家に行くと、大きな音でテレビがつけられて、その音にかぶせるように、おばあちゃんは自分が小さかったころの思い出とかをいろいろ話してくれる。私が読んだ本のお話を聞いてくれる。でも、そうすると、私は理想の帰り道をちゃんと想像できないし、本も読めない。

「お母さん帰ってくるまで、もう少し待ってみる」

「そう？　うちで待っていいんだよ」

「早く帰ってくるかもしれない」

細田のおばあちゃんが、リュックの外に出してある水筒を見る。

「飲むものはあかね」

「麦茶は全部飲んだ。でも帰る前に蛇口で水を入れてきた」

「学校の水飲み場で汲んだ？」

「うん」

「賢おい！」

でねえ。うちに今、100パーセントりんごジュースがあるに」

声をひそめて告げられた言葉に、私はいつのまにかうつむいていた顔を上げた。細田のおばあちゃんが笑っている。

「ジュースが欲しくなったら寄りないや。あと、6時になってもお母さんが帰られなかったらその時はえんりよせんでうちに来ない。

じゃあこれは、お母さんに渡してくださーい」

細田のおばあちゃんは私に回覧板を渡した。

「そうします。ありがとうございます」

私はちゃんとお礼が言えたことに満足する。

細田のおばあちゃんは家に帰ってしまったから、私は回覧板を玄関の近くの壁に立てかける。レンガの道をいろどるナスカの地上絵を選ぶことにする。

ナスカの地上絵なら、やっぱり蜘蛛の模様は外せない。私は、家のテレビにかけられた赤と白とオレンジの刺しゅうが入ったナスカの地上絵模様の布を思い出している。ハチドリが描かれたその布は、お父さんが出張先で買ってきたものだ。でも、歩道の幅はハチドリや蜘蛛を描くには狭すぎる。広場みたいなところじゃないと、描ききることができない。私は帰り道のどこかに広場を作ろうと決める。広場にはふんすいがあって、ふんすいの周りは、自由に入ることができる浅いプールみたいになっている。浅すぎて泳げないけど、水に打たれて遊ぶことはできる。大きな水のかたまりが、頭や背中に途切れずに落ちて来ると、水の振動が頭から足の先まで伝わるだろう。その状態で声を出すと、強いシャワーを浴びている時みたいに、何をしなくても私の声はふるえて、いつもより低く聞こえる。

水遊びが終わったら、近くの自動販売機でジュースを買いたい。自動販売機にはりんごジュースも果肉入りのオレンジジュースもさっぱりした桃のジュースもある。りんごジュースは、もちろん、果汁100パーセントで、水っぽいらんご風ジュースじゃない。細田のおばあちゃんちでジュースが飲みたい。

私はリュックからファールの本とビニール袋を取り出すと、袋に本を入れた（雨の日じゃないけど、いいや）。それから、リュックを回覧板の前に置いて、お隣の家に向かった。

細田のおばあちゃんは、私の親せきの人ではない。でも、お隣さんだから、本当のおばあちゃんたち（岡山のおばあちゃんと、大分のおばあちゃん）に会うより、たくさん会うし、話をする。特に、去年までは、お母さんの仕事が遅くなることが多くて、学校帰りによく細田のおばあちゃんちに行っていた。ときどき、夕飯も食べさせてもらった。それでお母さんは、いつも申し訳ないとか今どきありがたいとか言って、なるべく桃やかぼすのおすそ分けをしに行ったり、コープでお隣のおばあちゃんをお願いしたものを買ってあげたりしている。

2年生くらいまでは、細田のおばあちゃんの家に行くのがとても楽しかった。その時すでに、細田のおばあちゃんのだんなさんはお亡くなりになっていて、広い庭がある家には、おばあちゃんがひとりきりで住んでいた。細田のおばあちゃんは、だんなさんの部屋と、2階のいちばん奥の部屋以外なら好きに入っていいと私に言ってく

れているから、私はお菓子が置いてある仏間とか、えもん掛けに黒い洋服と着物の帯がかけてある部屋をうろうろして、いい匂いがする畳に寝ころがったり、見たことがないくらい綺麗な深い青色の（でも透けている）からっぽの香水の瓶を見せてもらったり、庭の苔からのびる赤っぽい茎みたいなの先にふくらみがついているのを抜いたりして遊んでいた。でも、3年生になったら、そういうのが2年生のころに比べて楽しくなくなってしまったし、おばあちゃんがつけているテレビもうるさく感じられて、もっと静かに本を読みたいと思うようになった。でも、人に対して、つまらないと言うのはきつといけないことだから、細田のおばあちゃんから「もっと来ていいのに」と言われた時も、「もう4年生になったから、家の鍵をもらったんだ」と答えておいた。実際、お母さんは、「4年生になったから、鍵を渡すね。絶対に無くさないように」と言っていた（私は鍵をなくしてなんかいない。玄関に引っ掛けた水泳用の袋の中にちゃんとある）。

細田のおばあちゃんちの玄関にたどりつく前には、松の枝をくぐらなくてはいけない。それは、1本の枝だけを細く長く育てた松で、松の枝は門扉の真上にのびて、塀の近くまでとどいている。松の門をくぐると、足元に苔がたくさん生えている。春になると、ここにタチツボスミレが紫に白まじりの花をつける。その後からは、タチツボスミレよりもずっと色の薄い、紫の丸くてふくらみのある小さ

な花が咲く。玄関の扉は鍵がかかっている。いちおう開ける前に、「こんにちはー、来ましたー」と声をかけた。扉を横にからからと開けると、ひやっとした風に包まれる。

すぐに細田のおばあちゃんが出てきて、はだしのままで戸を閉めてくれた。

「暑かったですよ」

私はあいまいに頷いて、靴を脱ぐ。100パーセントのりんごジュース。

私の顔を見て、細田のおばあちゃんが「はあ」と笑顔息を吐き出す。

「今、ジュース入れたげえけんね。ちょっこし待って」

私はお礼だけ言って、台所に向かうおばあちゃんとは別の方向にかけていく。縁側に面した部屋の方。テレビが、体にいいゴボウエクス入りのサプリメントを紹介し始めた。今買うとさらにもう10日間分！縁側の向こう、犬小屋の屋根がここからでももう見えている。窓辺に近づくが、キープが見えない。嘘だ。キープの鎖が見える。鎖は小屋から縁側の下に向かってのびている。私ははきだし窓を開けて縁側に出た。暑いけど、がまん。それにもうキープのにおいや、息をする音が聞こえてくるからほとんど結果は分かっている。それでも私は、縁側の下に頭をつっこんだ。キープが奥の方でのびているのが見え、ほっとした。

縁側から部屋に戻り、扉を閉めた。せつかくすずしい部屋なのに、暑い空気が入ってしまった。キープの赤い散歩ひもが目に入る。ひもは、ちゃんと縁側の籐で編んだのイスの近くの、いつもの場所に置いてある。あの女の方は、細田のおばあちゃんの知り合いの人なんだ。だからキープもなれていたんだ。盗人はいなかった。

「ジュース入っとるよー。お菓子もあるけん、良かったら食べて」

テレビの前の机にお盆が置かれる。皿に乗ったケーキと、ティッシュの上に乗ったのがひとつ。私の目の前に皿に乗った方が置かれた。

「このお菓子見たことない」皿には、何も入っていないように見えるパウンドケーキが切り分けられていた。でも何かくだものが入っている香りがする。りんごではない。細田のおばあちゃんちの定番のお菓子は、ぼたぼた焼きと、雪の宿だ。

「そげ？ 鳥取のなしのケーキだけど、前にあげんかったかいね」

「鳥取」

「砂丘があるあたりね」

私は砂丘を見たことがない。でも、ここで、おばあちゃんが見ていたテレビで砂丘を見たことがある。その時おばあちゃんは何と言っていたか。

「娘が仕事しとるところ、でしょう」

「そうそう！ よう覚えとったね」

頭の中で砂丘が浮かぶ。星空の下、ラクダの隊列が進む。

「砂丘にラクダがいるって、テレビで見たけど、私もラクダに乗れますか？」

「乗れよー、と細田のおばあちゃんが答えて、フォークを皿に置いてくれた。

それなら、理想の帰り道のどこかに砂丘を作ろう。そこにラクダも飼おう。もう少し考えかけたところで「りながさとりちゃんを見かけてねえ、それでさとりちゃんが外におるって分かったのよ」空想がとぎれた。りな。

「鳥取の娘さん」

「そう。はでな服着とったでしょ」

ようやく私は聞いてみる勇気が出た。

「キープを散歩させてたのって、おばあちゃんの娘さん？」

「ああ、ああ、会ったことなかったねえ！ あれね、うちの娘」

「そうだったのだ！ 良かった！」

私は本当にほっとする。だから、私にそっくりの誰かもいないし、キープにそっくりな犬と怪しい盗人ももちろんいないのだ。

思い出すと、細田のおばあちゃんの娘さん、りなさんが着ていたあのスカートみたいなズボンはかわいかった。

「私、あの花柄のやつ、好きです」

「ああ、キュロットのね。さとりちゃんの好みだね」

テレビはまだ通信販売の番組を流している。細田のおばあちゃんは、おもむろにリモコンを取って、番組を相撲に変えた。場内の歓声がひびいた。結びの一番だ。

相撲は興味がないけれど、おばあちゃんが見ているからなんとなくつきあって見てしまう。テレビで流れている番組は、たいがい全部そういうかんじで、テレビをやっているのにそれを無視するのは難しい。私の家ではあまりテレビをつけない。クラスの他の友だちは、とてもたくさんテレビ番組を見ているけど、うちはそうじゃなかった。ラジオはわりとずっとついていてくれるけれど、大きな音にはしない。それで、私は、ラジオ番組なら無視して本を読むことができるけれど、テレビの音や映像を気にしないで行くのは、まだ難しかった。

ケーキを食べながら、お相撲さんの紹介を聞く。モンゴル、ウランバートル出身、宮城野部屋。お相撲さんがひしゃくで水をもらって、それからもうひとりのお相撲さんがぱつと塩を撒く。塩をまいた手で、そのまま体を叩く。お相撲さんのふとももは揺れない。アナウンサーのひと、解説者の人の声と場内のざわつきしか聞こえないようにしてあるから、おすもうさんの息や足音は聞こえない。でも、体や顔を叩く音が聞こえてきそうだ。

「今も公民館の工作教室に行くことあるかいね。最近、何か作うなつた？」

「こないだは、こま……竹とんぼを作った」

結びの一番はなかなか始まらない。立ち合うかと思いきや、また元の位置に戻っている。こまは遊ぶのは楽しいが、作るのはそこまですれなく楽しかった。竹とんぼのほうはずっと楽しかった。

「竹とんぼは、竹ぐしはあったけど、羽のところは、自分でせんと、って言われて、ちゃんと竹をサンドペーパーをかけて、」

その時、いよいよ立ち合いが始まった。細田のおばあちゃんはテレビの方だけを見ている。組み合って、押し出そうとして、左側のお相撲さんがどうにか土俵ぎわでこらえて戻って（ここで大歓声）、もういちど、右側のお相撲さんが進もうとした。左側のひとはその間に右側の人をまわしを取りかけた（応援の歓声）が、うまくいかず、最後はあっけなく投げられてしまった（ああ、と声が落ちる）。おばあちゃんは声を出さない。ゆっくり顔を私に向ける。

「ごめんね。竹とんぼね。竹をすべすべにした？」画面には、さっきのお相撲さんたちの名前が浮かんでいる。勝った方は白い丸で、負けた方は黒い丸だ。

私は竹とんぼのサンドペーパーに目があらいものと細かいものがあるのを説明する。

「最初はあらい方を使ってとがったところを丸くして、それから細かいほうで磨くときれいにできるって言われて、やって、ずっとやってたら竹の断面のところいっぱい丸い穴が空いてるのが見えたから、それがきれいに見えるようにがんばった」

「それじゃあ、だいぶ磨いたでしょう」

「1時間！」

そのおかげで竹とんぼはつやつやになった。それから、公民館の図書室にある図鑑をもってきて、好きな生き物の色を調べて、竹とんぼの羽の両面にその生き物の色を塗った。軸を真ん中にした時の羽の右と左とで違う色にしましょうと指導員さんが言ったから、私は右を青、左を灰色にして、灰色の方にはちょっと黒の点をつけた。宝石ゾウムシだ。それから、羽の後ろに生き物の名前をマジックペンで書いた。外に出て竹とんぼを飛ばして見たら、指導員さんが言っていた通り、色が混じって面白かったけど、宝石ゾウムシの色じゃなかった。

「私も昔作ったことがあるよ。山に入ってね、竹を切ってね（えっ）」

「うん」

「ひごのかみで削っていくのがけっこう大変で（えっ）、あの頃はみんなそれくらいちゃっちゃとやったけど、このおばあさんは不器用でね」

「ひごのかみってナイフの名前？」

「そげそげ。昔は今みたいに鉛筆削り機がないけん、それで鉛筆も削ったに」

「ふうん」

私は自分で竹を切ったわけじゃない。切られた竹をナイフで削ってもいない。なんだか、私の工作はすごく簡単な工作だったみたいだ。

私はもう竹とんぼの話をしたくない。おばあちゃんの話は続く。おばあちゃんの話が、おばあちゃんのだんなさんに別の目的で竹を切ってもらったところまで来たところで、電話の音楽が流れた。

おばあちゃんはテレビの音量をミュートにして、台所に置かれた電話に出た。細田のおばあちゃんは電話の音も大きめにしているから、電話の向こうの人の声も聞こえてくる。はっきり何をしゃべっているかまではわからないけれど、女の人らしい声が聞こえる。

細田のおばあちゃんは、セールスの電話であれば適当なことを言うてすぐに切ってしまう。今回はそういうのとは違い、相手の話にいちいち返事をしている。話が長くなりそうなふんいきだ。私は立ち上がって庭に近寄る。キープの小屋の裏手には、逆さまにされた大きなつぼ（以前はこれで蓮を育てていたらしい）が2つ並んでいて、それ以外にはキープの遊び道具くらいしかない。だけど、そこから目を離すと、まずちょっと盛られたところがあり、そこに、花をつけたところを見たことがない木があり、その下にはふさみみたいな赤紫の花をつけるランと、時期が来ると葉っぱの後ろにオレンジ色のぼちぼちをつけるシダがふんわりと育っている。盛られていないところには、苔むした大きめの岩があり、雪柳がのびていて、岩の周囲に青い実をつけるリュウノヒゲ（妹のために牛乳をおつかいに行

く絵本を書いた人と同じ人が書いた絵本に出てきた)がある。右手の方には冬に赤い実をつけるから、雪うさぎを作るときにかつやくする南天の木があり、その奥にとろうろが立っている。真反対の左手では、白い花がたくさんつくなんとかウツギ(名前を忘れた)に囲まれた池がある。この池にはかつて鯉がいたそうだが、今は金魚だけが住んでいて、金魚の上に夏の初めに青紫の花をつけるホテイアオイが浮いている。道路との境目はフェンスで区切られているが、さらにフェンスにそってツツジも植えられている。ツツジは赤い筋が入るピンクと真っ白の花を毎年たくさんつけて、枯れる気配もなく緑の葉っぱをのばすから、今にもフェンスからあふれ出てしまいそうだ。この花に囲まれた庭にはチョウも鳥もいろいろやって来る。私の家との境目には、ツツジではなく、名前がわからない背の高い木が壁みたいに生えていて、私の家からこの庭をのぞくことができない。細田のおばあちゃんは、庭師さん呼んで、定期的に庭の手入れをしてもらっている。もともと、この庭はだんなさんがたんせい込めて手入れしていたもので、それを引きついでいるのだ。あの白い花、何ウツギだっけ。

おばあちゃんの話はなかなか終わらない。おばあちゃんのまゆの間にちょっとシワが寄っている。私はおばあちゃんの前に行って、仏間を指差して「あっちに行ってる」と言う。おばあちゃんが頷いたから、私は仏間に行く。最近は畳のにおいが前ほど濃くなくなってしまった仏間だ。仏間にはだんなさんの写真がある。このだんな

さんは、私が引っ越してくる前に亡くなったから、私は会ったことがない。「もしごぞんめいだったら、庭づくりについて色々聞きたかったよな」とお父さんが言っていた。

部屋には、前にこの部屋に入ったときにはなかった大きなかぼんがある。クリーム色の地にこげ茶の線で描かれた自転車やエッフェル塔やフランスパンが散りばめられた柄だ。おぶつだんの側には、おばあちゃんを使うものとは違う数珠も出ている。数珠はふしぎな黒い色をしている。そっと持って日にかざしてみると、その黒はただの黒ではなく、緑が煮つまったような黒だった。

鎖の音がする。数珠を戻し、テレビの部屋に行くと、キープがのそのそと縁側の下から出てくる場所だった。キープに手を振る。キープは、くわんと鳴きながらあくびをする。「キープ」と声をかけ、くるくる手を回す。吉岡さんちの芝犬は、こうすると自分の尻尾を追いかけるみたいにくるくる回りはじめる。キープはきょとんとしている。

私の後ろで、細田のおばあちゃんが立ち上がる。どこに行くのかと思って見ていると、いつもの食器棚の下の段に手をかけた。きゅぽん、とふしぎな音がして扉が開く。扉の向こうはからっぽで、棚の後ろの板が見えた。

「ああ、あったあった！

まあまた取りに来うだわ」

おばあちゃんは元気にそう言って扉を閉めた。おばあちゃんが振り返った。そういえば、電話を切る音がさっきしていた。

細田のおばあちゃんが私に笑いかける。

「おばあはトイレ行くけんね。ジュース冷蔵庫から出して飲んでいいよ」

私はうなずいて、でもしばらく動かない。おばあちゃんがトイレに入ったから、私は台所に行く。目的はジュースではなく、食器棚の一番下の扉だ。音をできるだけ立てないように、でも、おばあちゃんがトイレから出てしまう前に開けてみなくては。おばあちゃんがトイレトペーパーを引き出す音がする。今だ。

食器棚の扉は、小さい音を立てた。中にはなにもない。

私の家では、食器棚のいちばん下の段は、いつもは使わないものがたくさんつまっている。土鍋とか、ホットプレートとか、ジュースーとかが出てくる場所だ。でも、細田のおばあちゃんちでは、空き箱も新聞紙をたばねたものも出てこない。

さっき、たしかに、おばあちゃんは何かがあったと電話の向こうの人に言っていた。でも、実際にここには何もない。もしかして、細田のおばあちゃんは認知症になってしまったのだろうか。だから、わざわざ、鳥取から娘さんが来ていたのだろうか。

それとも、おばあちゃんには私に見えないものが見えているのだろうか。それとも、それとも、想像で見えているふりをしているのだろうか。

私は自分の理想の学校を作ってから、私が今通っている学校の天井に私にしか見えないステンドグラスがある気がする。私にしかにおわない桃の花が咲いていて、私にしかさわれないとげとげのサボテンが植えられていて、私にしか聞こえないオウムの声がするときがある。おばあちゃんもそうなのだろうか。

細田のおばあちゃんがトイレの水を流す音がする。手を洗う音を聞きながら、私は食器棚の扉をそっとしめる。今度は音はしない。代わりに、食器棚の中から木の香りがふわっと出てきてあたりをつつむ。どうか、開けたことが気づかれませんように。

私はたった今冷蔵庫の前にたどりついたふりをする。戻ってきたおばあちゃんに、わざと、冷蔵庫開けていいですかと聞く。「いいわね」おばあちゃんの口の端がにゅっと上がる。このにおいに気づいた様子はない。

冷蔵庫のなかには、作り置きのおかずがたくさん入っている。私がジュースを取り出すと、おばあちゃんも飲みたいと言って、コップに半分だけ注いでと言われる。その通りにすると、おばあちゃんはそれに氷と水を少し入れて飲みだした。私はあつけにとられてしまう。水を入れたら果汁100パーセントの意味がないのに。

「そういえば」

おばあちゃんはジュースを飲み干して私に聞く。コップの中には氷しか残らない。氷が、コップに触れ、からんと音をたてた。

「さっき、なんの本読んでたの」ほら「家の前にいるときに」

私はとっさにファールコンちゅう記だと答えるが、手元にある方の巻はまだ読み終わっていないから、その内容を説明できない。それで、おととい読んだ、糸で巣を作らない蜘蛛が出てくるほうの話をする。